

Title	第1回東日本大震災神学研究会 「生き残りの者と死者の救済：東日本大震災後の『死の蔭の谷』の希望」報告（2015年度 聖学院大学総合研究所 東日本大震災神学研究会 主催）
Author(s)	松本，周
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.25No.1, 2015.9 :49-49
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=5417
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

2015 年度 聖学院大学総合研究所 東日本大震災神学研究会 主催
 第 1 回東日本大震災神学研究会
 「生き残りの者と死者の救済-東日本大震災後の『死の蔭の谷』の希望-」 報告



発題者：阿久戸光晴先生

6月26日、駒込の学校法人聖学院新館にて標記研究会が開催された。参加者10名。

今年度から本研究会の研究代表に就任した、聖学院理事長・院長の阿久戸光晴師が「生き残りの者と死者の救済-東日本大震災後の『死の蔭の谷』の希望-」と題して講演した。2011年3月11日の東日本大震災発生直後から、2013年10月25日に韓国・長老会神学大学校でなされた講演に至るまでの思索の過程を、多数の資料により紹介された。

最初に、東日本大震災を「死の蔭の谷（詩編23編）」と捉えるのは、そこに世界史上比類のなさを見るからであるとし、それを①下から地震による「信」の破壊、②横から津波による「愛」の断裂、③上から放射線による「望」の遮蔽とまとめた。

そして被災者やボランティア学生との対話から浮かび上がった神学的問いとして、①死者は将来が与えられているか？死者に希望があるか？②生き残りの者に希望があるか？（遺体〔死者〕と生き残りの者の「ライフセイビング」が成り立つか？）との二つを、問題意識として提示した。

これらの点について、特にユルゲン・モルトマ

ンとの対話を通じて展開し、結論は「東アジアと世界の『死の蔭の谷』の希望『平和』」として、次のように述べた。死を経て神的時間に入る希望の中で、「死者」は「いのちの尊厳」を持続し「死者」のライフセイビングは成り立つ。また死をもすでにのりこえる神的時間に入る希望の中で、「生き残りの者たち」の「いのち（ライフ）」への究極の祝福（セイビング）がある。さらに再建に向けてとして、①「イエスキリストの十字架」という「隅の親石」が下を支える真の「信」。その前提として自らの罪責と自らの先達の罪責を隣人に告白し、同胞に真剣に呼びかける責務。②「イエスキリストの復活」により血縁を超えて「母マリア」と「弟子ヨハネ」が形成する「愛」のきずな。国籍を超えて存在し、形成されるべき普遍教会の存在の意義。③「イエスキリストの昇天」が悪魔（中空の主権者）的脅威を打破する「望」の輝き。以上の提言がなされた。質疑応答では、特に被災地支援に関わりつつ神学に取り組んでいる参加者との間で、示唆に富んだ意見交換がなされた。

（文責：松本 周〔まつもと・しゅう〕聖学院キリスト教センター主事／聖学院大学講師）